

明治期男女年齢別死亡率の地域パターン

Regional pattern of death rates by gender and age in Meiji Era

高橋眞一（新潟産業大学）

TAKAHASHI, Shinichi (Niigata Sangyo University)

報告者は江戸後期から明治前期にかけての地域別年齢別人口および出生率・死亡率推計を試みている。このために越えるべきハードルは数多くあるが、推計に最も重要な要素である生残率、つまり年齢別死亡率をどのように決定するかが重要な問題である。本報告では明治期を中心に、江戸後期から大正期を含めて地域別男女年齢別死亡率の変化がどのような特徴を持っていたのかを検討する。

まず、江戸後期の年齢別死亡率は宗門改帳等による分析が主となる。それらの分析結果の詳細な検討は今後の課題であるが、いくつかの分析からわかることは、年齢別にみた場合、高水準の乳幼児死亡率、若年層の相対的低死亡率、若年層から40歳前後にかけての日本に特有の女性の男性より高い死亡率、40歳代から年齢の進むにしたがって死亡率の加速度的上昇という、いわば年齢によるU字型パターンが見られる。

明治期の地域、特に府県別男女年齢別死亡率を得るためのデータは明治前期では唯一1884（明治17）年に男女年齢別本籍人口と現住死亡数として得られる。明治前期の人口および死亡のデータは届出漏れ等の大きな問題があった。死亡に関しては1884年の埋葬等届出の義務化以降、比較的正確になったと言われている。また、本籍人口と現住人口の差に留意する必要がある。ここでは人口静態・動態データともに正確になった1920（大正9）年第1回国勢調査以降、1921-22年人口と死亡統計を利用して、各府県の明治および大正期の男女年齢別死亡率を比較した。

その結果、年齢死亡変化についていくつかの特徴を見いだした。第1に、明治前期と大正期について、前述の男女年齢によるU字型死亡率パターンが、死亡水準は異なるもののすべての府県において見られた。第2に、若年層において、結核死亡の上昇による凸状の相対的に隣接年齢層よりも高い死亡水準が、大正期ではすべての府県で見られた。同時に、この年代の大正期の死亡率は大部分の府県で明治期を上回った。第3に、江戸後期には見られた15-40歳代の男性より高い女性の死亡率は多くの府県で大正期においても見られた。第4に、乳幼児死亡率および60歳代以上高齢死亡率について、一部の府県を除いて、明治期より大正期の死亡率がより高い水準にあった。乳幼児死亡率について考えられる理由のひとつとして、明治前期における届出漏れの多さが乳幼児死亡率を本来の水準より低くしていたことである。それを考慮したとしてもなお乳幼児死亡の上昇があったのか、現在のところ判断できない。また、高齢人口における明治期の相対的低死亡率は、本籍人口の高齢死亡の届出漏れによるものと考えられる。

明治期の地域別に見た男女年齢死亡パターンの性格を明らかにするために、死因や死亡の季節性を考慮することも重要である。また、江戸後期から明治前期にかけての地域死亡パターンが連続的に同じようなパターンとして捉えられるか否かを明確にすることも重要な課題である。